# 「グローバル教育実践演習」からの学び

関谷将浩

## １ はじめに

グローバル教育実践演習では、韓国や中国の大学・学校における研究発表や視察といった交流から多くを学んだ。本稿では、韓国や中国での多様な経験を通して、他国の文化や教育における共通点、そして今後の国際交流のあり方について学んだことを振り返る。

## ２ 実際に学んだこと

### （１）韓国と中国で感じた日本との共通点

韓国では、私は大学や日本人学校の視察ではなく、同行した子どもと共に、国立民俗博物館や国立中央博物館を見学した。その際に、昔の稲作等を中心とした人々の生活が日本と似ていることにとても驚かされた。しかし、日本の歴史が朝鮮半島や中国大陸との関係の中で築かれてきたことを踏まえれば、人々の営みも自然と似てくるのだと納得した。また、中国では、四川師範大学や北京師範大学珠海校区での研究発表・交流などに参加した。中国が生成 AI の普及や少子高齢化、多様性への対応といった、日本と似た背景や課題を持ちながら教育と向き合っていることを知った。グローバル化が進む世界において、日本の教育課題は決して日本だけが抱えるものではなくなってきていることを実感した。

### （２）視察を通して気付く日本の教育のよさ

中国の広州市の冼村小学校や京師奥園南奥実験学校への訪問を通し、専門の教師による音楽やダンスの授業、メニューが豊富な食堂での給食、さらには大人数での寮生活など、独自の取組や充実した環境を数多く学ぶことができた。学校訪問の際は、私たちの案内を児童が行っていたのも、非常に印象に残っている。リーダーとなる素晴らしい児童を育成する中国の教員の方々の指導力の高さに感銘を受けた。一方で、日本が進める「個別最適な学び」のように、子どもたち一人ひとりの多様性を認める日本の教育のよさにも改めて気付くことができた。

### （３）各国で触れた人々の温かさ

韓国の地下鉄では、現地の方が同行した子どもを気遣い、席を譲ってくれたことがあった。中国では、食事の席で円卓に座り、顔を見合わせながら、楽しく交流をすることができた。私は、日本が「おもてなしの国」と言われていることもあり、他国の人よりも日本人のほうが温かい人柄なのではないかという先入観を持っていた。しかし、実際に現地へ赴き、韓国や中国で様々な方々と交流する中で、どちらの国の人からも他者に対する温かさを感じた。「〇〇の国の人は冷たい」といった偏見を耳にすることがあるが、これは誤った認識であり、実際に現地で経験することの大切さを実感した。

## ３ おわりに

本演習をきっかけに、国際交流のよさを広く伝えていきたいと考えるようになった。一方で、国際交流の経験がない人にそのよさを正確に伝えることの難しさも感じた。また、今回訪問した中国の地域は教育的に非常に進んだ場所であり、現地の先生からは「電気も通っていない地域の学校もある」と伺った。今回の韓国と中国での経験は国の一部に過ぎず、それが全てではないという事実を忘れてはならない。国際交流のよさや実態を伝えるためには、一度の経験だけでなく、何度か足を運び、多様な見方を経験することが不可欠である。今後学校現場に戻ることになるが、機会を見つけてより多くの地域を実際に訪れ、自らの足と目で世界の教育現場を見つめ直す時間を作れるようにしたいと考える。